

古座川という田舎で暮らす極意

遊びに行く田舎と生活する田舎は違う

1. 古座川に移住するという事は

自然豊ではあるが…(被害もある)

今の田舎の自然は人が手を加えたもの

その自然を維持するために自分もその一員になる覚悟を持つこと。

また自然がいっぱいという事は、台風、大雨、洪水などの災害の危険が常につきまとうということでもあり、猿・鹿・猪などによる農作物への被害があることを忘れてはいけない。

土地・空家はあるが…(貸してはくれない)

休耕田や放棄された山林など利用していない土地、空家があっても、見知らぬ者に売ったり貸したりすることはまず少ない。

都会でも突然やってきた見知らぬ人に土地など売ってくれるはずがない。

要はその人の誠意と信用度。

生活にお金がかからないか(田舎も都会も同じ)

現実には、田舎ほど食えない。もともと田舎に住んでいる人は、先祖から受け継いでいる土地や家、機材などがあるから支出は少なくてすむ。

都会で経済的に安定しない人は、田舎へ来てても生活は苦しい。田舎暮らしを始めたら、都会時代より生活レベルは落ちる覚悟がいる。

田舎の人はやさしいが…(ギブアンドテイクの関係)

人口密度は低くても人付き合いの濃度は高い。人づきあいを拒否して田舎暮らしはできない。他人と関わらず暮らしたければ、都会に住むか、別荘地のような所をめざすべき。

昔から農林業は、共同作業多く、みんな助け合ってきた。相互扶助意識が高い。

このことを理解しないと田舎暮らしに失敗する。

田舎は隣近所「持ちつ持たれつ」の社会であることを認識しておくべきである。

交通事情が悪い(車があれば都会と同じ便利さがある)

都会のように公共交通が整備されていない、車は生活必需品。

車がなければ生活ができないことを認識しておくこと。

- * 田舎暮らしはしたいが、勝手きままに生活したい人は、別荘地やリゾート地など、地域との接点の少ないところを選択する方が良い。
- * 田舎暮らしとは、その地域に根付き地域に溶け込み地域の原動力となることを意味する。

2. 計画性のある移住へ

一時のあこがれや、なんとなく田舎に住みたいとの想いだけでは、失敗する。
計画を持ち、(当然経済面の計画も持つこと。田舎にいけばなんとか生活できるという甘い考えは持たないこと。またもっても無理)
自分で情報収集することが大切

自分が住みたい田舎の条件をじっくり考えること

- ・気候
- ・風土
- ・経済条件
- ・交通
- ・医療・福祉
- ・行政サービス

その地域の事前情報の収集

できるだけ多くの資料・情報を収集しておくこと

現地を訪れる

自分の目で足で、住みたいと思っている地域を必ず訪れ、住めるかどうか見極めること

定住窓口での相談等

役場、住みたいと思っている地域の区長さんなどの話を聞くこと。またはすでに定住している方の話を聞くことが大事。

移住の準備(ただし何度も現地を訪れ横のネットワークを広げること)

時間をかけ地域を知り、人を知るという意識がなければ定住まで結びつくことはむづかしい。地域の人との接点を自分で求めていかないとだめ。

行政だよりの移住計画は、やがて失敗に終わる。

ここに住むと心を決めたらあとは自助努力で、その地域のネットワークを広げること。

- * いずれにしても思いつきは失敗する。じっくりあせらず自分にあった田舎を時間をかけてさがすべき。
- * 最後は自助努力。

3. 古座川の人が歓迎する移住者

地域に溶け込める人

古座川は、過疎高齢化で地区が維持できないところも出てきている。

多くの人々が期待することは、地域に溶け込み地域の人材となれる人である。

また、休耕田や遊休地が多くなっているなかで、それらを活用し「地域おこし・地域づくり」に一役買って産業振興につなげてくれる人が期待されている。

都会では、道や河川の管理維持補修、清掃は行政の仕事と決めつけている。

一方田舎では、こうしたことは地域の人々が自分たちでやるのが当たり前である。田舎で一生暮らすつもりなら、そうした覚悟を持つことである。

もっと言えば“田舎で住む方が都会よりエネルギーが必要”ということです。

顔の知れた人

田舎の人は、一体何者かわからない人が、自分たちの土地に入ってくることには不安がある。

特に新興宗教など各地でトラブルをおこしている。

そこで、住むと決めた地域には、事前に何度も足を運び、区長さんや地域の人たちと知り合いになり安心感を高めておくことが絶対必要である。

すなわち「顔の知れた人」に事前になっておくことが、地域に溶け込む最大の武器と条件になる。